

現代の住まいの在り方を考える To think perspective of modern living

棒田 恵
Satoshi BODA

新潟大学, 助教, 博士 (工学) (s.boda@eng.niigata-u.ac.jp)
Niigata University, Assistant professor, Dr. Eng.

災害によって地域で営まれていた生活が災害に強い住居や都市形成のために更新されていく状況を人為的におこる2次災害と考え、今後の住居の在り方について考察する。新潟県柏崎市門出集落、中国東北部でのカンを持つ住居の調査での伝統的な住居と住まい方に内在する変化を許容する仕組み、三条市での住民・学生・専門家・行政との協働によるポケットパークづくりの実践的なまちづくりに着目して、住居の在り方やまちづくりについて考える。

住居計画, まちづくり, 持続性, 地域性 Housing design, Town design, locality, sustainability

1. はじめに

私は、国内外の集落を研究し、また実践的なまちづくりなどを行っており、災害に関しては直接関係していないため、これまでの研究・活動を通しての見解と、「すべての災害は人災である」というテーマに対しての私自身の課題を考えたい。

都市部への人口集中による空き家の増加、集落の維持管理が行き届かないことによる住居の老朽化、また伝統的な住宅の構造・住宅性能は、近年建てられる建物に比べ、十分ではないために、取り壊しあるいは建て替えられることは仕方がないことである。しかしながら、伝統的な住居には、長い時間かけて、生活の知恵が蓄積されており、住居周辺環境との関係、また、様々な人々の日常的生活行為、冠婚葬祭などの非日常的な行事といった多様な空間と機能が重層してひとつの住居というカタチをつくっている。災害に強い住居や都市形成のために、このような住居が取り壊され、そこでの生活がなくなることは、人為的におこる2次災害と捉えられる。伝統的な住居の持つ特徴を現代のカタチに翻訳して活かしていくべきであると考えている。

2. 集落・住居の研究から学ぶこと

国内外の集落・住居、特に新潟県内と中国東北部の住居を調査する機会が多く、伝統的な住居に内在する生活の豊かさに惹かれ、研究を行っている。

私の調査した集落のひとつに新潟県柏崎市門出集落がある¹⁾。門出集落には、アタリ、トナリグミ、マキといった役割・規模の異なる関係が存在している。アタリは冠婚葬祭等で親戚同様の付き合う隣り合う住居の関係、トナリグミはミチツケ、ミチブシン等の集落内の仕事を行う関係、マキは本家と分家あるいは分家同士の関係である。これらの関係は、それぞれで結ばれるため、集落全体で関係が重層して形成されている。特にトナリグミは、

3つの関係の中で特徴的な仕組みがあり、住居の転出転入などによって、不均等になると組み直さるといった可変的な性質を持っている。一方、マキは血縁、アタリは地縁といった関係であり、柔軟に変更するのは難しい関係である。異なる関係がそれぞれ異なる役割を持ち、複層して繋がることで集落としての持続性を確保している。



Fig. 1 新潟県柏崎市門出集落のミチブシンとミチツケ

中国のカンと呼ばれる暖房を持つ農村住居の調査も継続的に行っている²⁾³⁾。カンは、韓国のオンドルのように調理時の廃熱を利用したものであり、中国東北部では一般的な暖房方式である。基本的な住居形態は、横長方形住居であり、中央に厨房、その左右に臥室と呼ばれるカンを設置した寝室が並ぶ構成をとっている。建設年の古いカンを持つ住居では、住居南側の窓下にカンを設置し、接客、食事、団欒、就寝まで、様々な用途でカン上が利用されている。中国の都市部では戸建て住居から高層集合住宅に建て替えられるため、ほとんどみられないが、農村部では現代の生活に合わせながらもカンを持つ住居は建設されている。

近年、建設あるいは増築・改修される住居の中には、カンの位置を住居の北側や居室の中心に設置する伝統的な住居とは異なる住居が現れ始めている。これらの住居

では、就寝とそれ以外の生活行為の分離、接客空間の専用室化などによってカン上での生活の一部をカン前や別の居室へ移行するようになってきている。また、南側の窓下にカンを設置する住居も建設され続けており、これらの住居では、生活空間と水回りの空間を分けるといった住居中央の厨房とカンのある居室との関係が変化している。カンを持つ住居には、それぞれの地域や生活の状況に合わせてながらも、カンでの生活を軸にした住環境の変化の仕組みが存在している。

調査対象としている集落・住居の中には、変化を許容しながらも、集落・住居の特徴を継承する柔軟な仕組みを持つものがあり、これらが生活の豊かさの要因の1つであると考えている。



Fig. 2 中国東北部の農村住居とカン

3. まちをつくることから学ぶこと

教育・研究活動として、まちづくり活動も学生時代から現在まで行っている。その1つの活動に、三条市での学生・住民・専門家・行政が協働して、弥彦線高架下の空地を毎年1つポケットパークとして整備するまちづくり活動がある⁴⁾。里山の緑をまち中に移植することを活動のコンセプトとして、参加者がポケットパークのデザイン、実際に里山を歩き植生の調査を行っている。デザイン検討の際には、具体的なカタチの他、子どもの遊びや敷地へのアクセスといった使われ方、隣地境界線、維持管理などに関する議論も行われている。実際の公園を対象としているため、毎年異なる問題が発生し、その都度、解決策を探しながら進めている。小さなポケットパークの建設という活動であるが、方向性を毎年考えながら、活動を行っており、参加者にとって学ぶことの多い活動である。

住民と学生が協働して実際の住環境を創造していく活動を通して、身近な環境を再認識し、今後のまちの在り方を考える機会になっている。さらに、近年、災害に強いまちづくりを各地でおこなわれているが、自然災害である地震や洪水などは、住民が日頃から意識することも大切であると考えている。そのため、今後、実践的なまちづくりを行う際には、住民や行政と協働しながら、災害時、災害後にも配慮して住環境を提案していく必要があると感じている。



Fig. 3 建設されたポケットパークと活動の様子

4. おわりに

近年、空き家改修などが盛んに行われ、その魅力が再発見されつつあるが、古く住みづらい住居と認識する住民が多く存在している。私の調査した住居の中でもそのような意見を持つ住民は国内外問わず多くみられる。これらの住居が更新される際、居住性能の向上を行うと同時に、伝統的な住居の研究やまちづくりを行っている私としては、地域特有の空間・住まい方の特性が住居に反映されることを期待している。本稿で挙げた事例は、一部であるが、伝統や地域特性といった工夫が蓄積された住居・住まい方には、現代の住居を豊かにしていく工夫が多く内在しており、設計手法の開発に向かう研究をおこなっていくこと、また、住民・行政と協働してまちづくりを実践しながら土着的な住環境の更新の仕組みを創っていくことが、私の今後の課題である。

参考文献

- 1) 松岡聖史・西村伸也・棒田恵・他2名：高柳町門出における集落構造に関する研究－集団形成による集住の仕組みについて－，日本建築学会学術講演梗概集，pp. 59-60，2011.08
- 2) 棒田 恵・西村 伸也・他 10名：改修と増築によるカンと炊事空間の変容と機能分化 中国東北部の農村住居における空間変容に関する研究(1)，日本建築学会計画系論文集 78(694)，pp. 2465-2472，，2013.12
- 3) 棒田 恵・西村 伸也・他 10名：カンを持つ農村住居の炊事空間の変容 中国東北部の農村住居における空間変容に関する研究(2)，日本建築学会計画系論文集 79(702)，pp. 1729-1736，2014.8
- 4) 櫻井典子・西村伸也・棒田恵・他4名：協働ポケットパークづくりにおける参加者の意見と行動の考察－地域と大学の協働によるものづくりを介した持続的住環境形成の研究(その3)－，日本建築学会学術講演梗概集，pp. 1075-1076，2011.08